

「台兒庄派遣部隊」の初戦

姜 克 實

一、台兒庄作戦の背景及び派遣部隊の編成

1938年3月22日午後5時40分、山東省南部嶧県の城内、歩兵第六十三聯隊長福栄真平は、瀨谷啓支隊長（歩兵第三十三旅団長、少將）からの「瀨支作命第35号」を受領した。内容は「歩六三ノ第二大隊、聯隊砲隊一部、野砲兵第一大隊主力、工兵半小隊、衛生隊一部旅団無線一ハ明二十三日台兒莊附近ニ向ヒ前進シ同地附近運河ノ線ヲ確保スヘシ」¹、である。福栄は直ちに「台兒庄派遣部隊」を編成し、23日午前9時、台兒庄に前進させた。

台兒庄は、微山湖に繋ぐ京杭大運河北岸に立地する商業の町で、微山湖口にある韓莊の東40キロの処に位置する。台兒庄作戦は、瀨谷支隊が3月14日（西戦線）から始めた「南部山東剿滅作戦」の一環で、作戦地域最南端の境界線である大運河一線を確保する目的であった。

「南部山東剿滅作戦」は、治安維持と称した地方掃蕩作戦であり、地域を山東省南部に限定されていた。東側の沂州（臨沂）方向から第五師団坂本支隊（坂本順少將、兵力約12000名）と、西の津浦線側から第十師団瀨谷支隊（瀨谷啓少將、兵力約14000名）の同時進攻で、挟み撃ちの形で嶧県（台兒庄北35キロ）附近に合流する計画であった。度々発生する下級部隊による暴走を抑制するため、作戦範囲は限定され、北支方面軍から、「第十師団に対し大運河以北の敵を撃滅した後は概して滕県及び其南方地区を確保して治安肅正に任せしむべき」旨を指示された²。このため、大運河を超える作戦が厳禁され、韓莊、台兒庄の運河線はいわば、作戦南端の境界線であった。

「南部山東剿滅作戦」が開始してから、西部戦線の瀨谷支隊は3月14日から鄒県より南下し、界河、滕県、南沙河、官橋をへて臨城に迫り、四川軍（第二十二集団軍、約20000人、孫震司令）に対する作戦を順調に展開させ、滕県の陥落を待たずに、3月17日午後5時30分、一挙に四川軍の司令部たる臨城（滕県南38キロ、現薛城）を陥落させた。その後、南下して大運河口の韓莊（現在微山県）、とその東方にある坂本支隊と合流の予定地点である嶧県を占領し、21日、わずか一週間の時間で、ほとんどの作戦任務を全うし、戦死者39名、負傷者229名という僅少代価で、20000名を超える四川軍を壊滅（7000名戦死）させた³。

西の津浦線側瀨谷支隊の快進撃に対して、東の坂本支隊は沂州地域で歴炳勲部隊の頑強な抵抗に阻まれ、西への進撃は出来なかった。22日先に嶧県に入った瀨谷支隊は師団から沂州応援

の命令を受け、沂州支隊（第十聯隊第一大隊〔加村旭少佐〕を基幹）を編成して24日に出発させた。

この時（3月24日）、瀬谷支隊の14000人の部隊は、一、津浦線の臨城、韓荘の警備部隊（第十聯隊の一部、歩兵約二個大隊）、二、棗荘及び中興公司の炭鉱を守備する部隊（支隊主力の歩兵約二個大隊）、三、沂州支隊（歩兵一個大隊を基幹）、四、台兒庄派遣部隊（第六十三聯隊第二大隊を基幹）と、四方面に振り分けられ、主要な作戦目標は、台兒庄方面ではなく、沂州への第五師団救援（沂州支隊の派遣）及び、棗荘炭鉱の確保と郭里集の東北山地にある湯恩伯軍主力の撃滅にあった。そのため、編成を見ても分かるように、「台兒庄派遣部隊」の兵力は少人数で配属の武器も貧弱であった。目的は南方の安全を確保するための「搜索前進」であり、もちろん、台兒庄には強敵が待ち構えていたことを想像もしなかった。

台兒庄派遣部隊の編成は次の通り：

歩兵一個大隊（歩六十三聯隊第二大隊、安永興八中佐、編成定員1091名、馬118匹）

聯隊砲約一個中隊（山砲中隊の半分+速射砲中隊の半分＝4門砲、定員125名、馬35匹）

野砲兵一個中隊（10A（第十野砲兵聯隊）第二中隊、正中為雄中尉、改造三八式野砲4門、定員128名、馬108匹）

他に、工兵半個小隊、旅団無線1基、衛生隊1/6（人員10名）、聯隊無線の有線班、対空班の一部の構成で、合計人員定員約1500余名、馬約350匹であった⁴。

また、主な兵器：

四一式75耗山砲（聯隊砲）2門（歩兵聯隊所属の砲兵）

九四式37耗速射砲（聯隊速射砲）2門（歩兵聯隊所属の砲兵、近距離用）

九二式70耗歩兵砲（大隊砲）2門（歩兵大隊所属の砲兵、軽便砲）

改造三八式75耗野砲4門（第十師団野砲兵聯隊の砲）

九二式重機関銃8挺（歩兵大隊の機関銃中隊、口径7.7MM）

十一年式軽機関銃24挺であった⁵。（各歩兵中隊の装備、口径6.7MM）

この編成（1500名、火砲10門、重機関銃8挺）は、3月24日、第二大隊による第一回攻城作戦の総ての戦力であった（以上総ては編制上の計算で、実際戦闘死傷の欠員などにより、戦力全体は約二、三割不足していると考えられる）。

一方、3月23日、初日における派遣部隊の戦闘消耗の報告を受け、聯隊長は急遽、弾薬、糧秣の補充隊（輜重車45輛、200キロ×45＝積載量約9トン）を組織し、第八中隊黒田栄一少尉に指揮させ、歩兵二個小隊（第七中隊、第八中隊各一小隊）の護衛をつけ24日00:40、台兒庄に向かって出発させた⁶。この行李隊は、後述のように、前進の途中、三里庄附近で、敵部隊に遭遇し包囲されたが、居合わせた第五中隊に救出され、25日午後、滄浪廟にある第二大隊本部に到着した。

また3月24日、第二大隊の台兒庄攻城失敗の報告を受け、福栄聯隊長はさらに歩兵第十中隊（永島朝好中尉）、歩兵砲小隊（益田正少尉）、独立重機関銃中隊の1/4（九二式重機関銃2挺）、及び、支那駐屯軍砲兵混成第六中隊（内野貞利大尉、九六式十五糎榴弾砲2門、観測小隊、中隊段列

及び大隊段列の一部、人員105名、牽引車、自動貨車数不詳）を増援させ、26日朝4時、さらに歩兵第二中隊（松原石人大尉、欠一小隊、人員154名）⁷と10A野砲兵第三中隊（山口芳男中尉、野砲4門）を追加派遣した⁸。

以上を合計すると、3月26日時点で、台兒庄派遣部隊は、歩兵六個中隊、砲兵三個中隊合計人員2300余名になり、砲兵火砲10門、歩兵火砲8門、重機関銃14挺、軽機関銃36挺であった。この編成は、3月27日朝の第二回攻城作戦のすべての戦力である（27日午後、福栄真平が率いる「台兒庄攻略部隊」が到達）。

二、3月23日の戦闘経過（台兒庄への搜索前進）

3月23日朝、数メートルの先も見えない、濃い霧が立ちこめていた。派遣隊は08:50嶧県東門外に集合、東北方向高地を占拠している「機関銃を有する約敵百内外」の盲射を排除するため、予定より幾分遅れて前進し始めた。この時霧が晴れ「天気晴朗ニシテ既ニ春色野ニ満チ敵影ヲ見ス」と第二大隊の戦闘詳報が記録する⁹。

派遣隊は台棗鉄道（台兒庄まで約30キロ）に沿って前進し、午後1時前、泥溝（台兒庄北東14キロ）北東の前城という部落に到達した際、泥溝駅の方向から敵500名による射撃を受けた。安永大隊長は、第五中隊（山本春信中尉）を左第一線、第六中隊（伊藤敏雄中尉）を右第一線に展開させ、砲兵を前城に陣地を占領させ砲撃を加え、交戦のすえ、14:30泥溝を占領した。14:50泥溝南の北営田村の敵を攻撃し、15:40これを占領し、黄家埠、南営田の敵は戦わずに敗走した。

その後、歡堆（欢屯、台兒庄北西10キロ）に前進し、村北西で約1000名は自動火器を装備した敵部隊の「意外に頑強」な抵抗を受けたが、戦闘の末、17:30敵陣地を占領した。続いて第六中隊は歡堆を、第五、七中隊は北洛を攻撃、「日没後夜陰ニ乗シテ一挙敵ニ突入…午後八時同部落ヲ占領ス」。敵は信号弾を上げ、台兒庄の方へ退却した。その後部隊の一部を歡堆、主力を北洛に集結して「至巖ナル警戒」の中、夜を明かした¹⁰。

この日、聯隊本部への報告に、交戦相手は第三十一師九十三旅一八五団の1500名で、重機関銃3、4挺、チェック20挺余り、軽迫撃砲若干であった。戦闘の結果、敵「遺棄死体230」名である、と書かれた。中国軍第三十一師長池峯城の話によると、一八五団の二、三千名は、日本軍を台兒庄の方向に誘い込む任務を負った部隊であった、という¹¹。第六十三聯隊の記録には、この日台兒庄派遣部隊の死亡者はいなかった¹²が、負傷者は若干名いたようだ。後述『渋谷昇日記』に「間宮」という兵士の負傷が記されている。一日の戦闘で弾薬の消耗が激しかったので、補充のため、聯隊本部は前述の補充弾薬、糧秣を輜重車45輛（約9トン）に積み、第八中隊黒田栄一少尉の指揮した歩兵二小隊の護衛をつけ、24日00:40、台兒庄に急行させた¹³。

三、3月24日、3月25日、第二大隊第五中隊の戦い

3月24日払暁、安永大隊長は台兒庄城北側から鉄道沿いの三里庄（台兒庄北西1.5キロ）にかけて、各部落に敵が充満しているとの偵察報告を受けた。台棗鉄道の台兒庄北駅から南洛までの鉄道沿線及び、城壁近いの村落、鉄道西のエリアは、中国軍の防御の重点地域であったようだ。正面の強敵を避けるため、安永は06:00第五中隊（一小隊欠、機関銃小隊を配属）を右側（西側）鉄道沿いの孫庄、劉家湖（劉湖村、台兒庄北3.5キロ）の方向へ進めて正面の敵を牽制させ、主力を東迂回させ、三佛楼（三付楼）、楊家廟（楊廟村）をまわり、棗庄、劉家湖に向かって南下、台兒庄城東北部に接近した。防御の堅い駅周辺と城西北部を避けるための作戦である。「敵ハ我カ数十倍ニシテ有力ナル重火器ヲ有シ装甲列車又盛ニ活躍ス依ッテ…第五中隊ヲシテ敵ヲ駅附近ニ牽制シテ其ノ間一挙ニ突撃シ断行スルヲ可ト認ム」、という。

牽制を担当した右（西）側第五中隊は、大隊主力と分かれ、08:40劉家湖東側に進出し、10:20、大隊砲火の支援を受け鉄道線路に向かって西進し、墩上（劉家湖西1キロ）を占領した後、鉄道を越え板橋東方、鉄道西の敵を撃退して、西方から西三里庄の敵陣地を攻撃した。三里庄は真ん中を通る台棗道路によって東、西に分割され、五、六百名の敵が守備していると報告された。攻撃は、台兒庄（停車場）方向からの敵の猛烈な側射を受け、進捗しなかった。第五中隊は一旦攻撃を中止し、日没後20:30、夜襲で西三里庄に突入し、東三里庄に戦果拡張しようとする矢先、誤って敵陣地に踏み込んだ黒田少尉が指揮する補充隊一行を発見し救出した。黒田隊は朝嶧県から派遣され、台兒庄を目指して急進中であった。第五中隊は危うく遭難した補充隊を劉家湖西西南無名部落に誘導し、警備にあたった。敵との遭遇戦で、大行李長の他、輓馬七匹が戦死した、という。劉家湖周囲の部落に敵が多数おり、夜暗を利用して第五中隊がいる村落を「敦囲」した。作戦地図を確認すると、場所は鉄道に面している敦上か、その付近の村のようである。第五中隊は敵と咫尺の距離で嚴重な警備を敷き、一夜を明かした。

夜が明けた25日朝、中国軍は「喇叭ヲ吹奏スル等衆多ヲ特ミ稍々敦囲ノ勢アリ」、08:00鉄道から装甲列車も前進して来て、第五中隊に攻撃をかけた。激戦しているさなか、早朝嶧県を出発した増援部隊たる第三大隊第十中隊（永島朝好中尉、他歩兵砲2門、重機関銃2挺、輜重車22輛）が劉家湖北に到達し¹⁴、敵情を確認してから11:40背後から劉家湖を攻撃し、12:50これを占領した（敵遺棄死体30、機関銃1）。このため13:30、敦上を包囲中の中国軍が退散し、第十中隊は第五中隊、補充隊と連絡を取れた。その後補充隊は劉家湖に入り、第十中隊に掩護され15:00分散して出発、滄浪廟にある大隊本部に到着した。これで、第二大隊の前線部隊は23日朝出発してから初めて弾薬の補充を受けた。その後第五中隊は右側警備の任務を第十中隊に交代させ、26日03:30滄浪廟で大隊に合流し、翌27日の第二回目の攻撃に備えた¹⁵。24日から25日の二日間の戦闘中、第五中隊にも幾分の死傷が発生した。聯隊、大隊の戦闘詳報には細かい記録はないが、『渋谷昇日記』¹⁶からその一斑を窺える。

『渋谷昇日記』は中国大陸で流布する日本兵の日記で、4月7日日本軍が台兒庄から撤収後紛失し、中国軍従軍記者曹聚仁が嶧県附近で入手、保管した。戦後、その内容が公開された。見開きに「北支派遣軍 磯谷部隊 福榮部隊 安永隊 山本隊 第二小隊塚田隊 第五分隊 渋谷昇

然走」と記され、歩兵第六十三聯隊の「戦闘参加将校人名表」¹⁷と照合すると、第二大隊(安永興八中佐)第五中隊(山本春信中尉)第二小隊(塚田房夫少尉)第五分隊の所属と分かる。

日記には前述の24日、25日の戦闘場面をも記録していた。戦闘詳報の記録ほど詳細ではないが、死傷者の名前を記録しており、これが、戦後作成された戦死者名簿と照合できる。ただ、翻訳の誤り(日記の原本未見、流布するものは訳本のみ)と記録の不完全で、一般人はなかなかその内容を理解できない。以下では、戦闘詳報の記述と照らしあわせ、もう一度『渋谷昇日記』を解読しよう。文は原文のまま、()内は筆者による訂正、解説である。

三月二十三日

上午七时(十时)南门(从峰县东门)出发，第二分(大)队沿铁路前进，总队部向泥沟车站之敌阵(约500名)展开猛射，杀敌颇众，夜袭车队(站)东南面之北落(北洛与欢堆)村，间宫君受伤。

二十四日

上午六时北落(洛)村出发，向台儿庄前进，第五中队及机关枪队(一小队)(为右翼第一线，在大队炮火支援下)向铁路敌阵(東、西三里庄)开始进攻，敌兵约数千名(此处夸张)。第五中队呼应总队部(在大队炮兵的掩护射击下)向敌阵进攻，受敌方猛烈射击，不支，伏于麦田，谷川君(谷川良吉，上等兵，气高郡青谷出身)战死，第三小队之见泽君(三澤整一，上等兵，能義郡安来出身)去向不明(战死)，中仓、中原两君受伤，(白天攻击失败，夜晚我部队)向铁路东西面村落夜袭，小队长下令，各兵要抱死心。敌方以捷克机关枪猛射，我伏在地上，立在前面之森君(森井要口郎，松江东本出身)中弹即死，黑川君(黒川憲博，上等兵，東伯郡巖城出身，死亡)亦中弹倒地，金田君负伤，战车队向南面募进(此处记忆混乱，战车队到达为27日)，展开肉搏战，小队长负伤，(此时发现运输辎重队误入敌阵地，遂前往救援)因敌兵甚多，我军含泪而退，见马十只倒地(七匹死亡)，经理部长(行李班长)战死，其他死伤不少，敌方发射愈猛，我中队(与行李队被困在刘家湖西南无名村落)不能与总队部取得联络，约历一夜，川谷(谷川的重复)君战死。

二十五日

(昨夜来我部被围在敦上村内，上午8时，发现铁路上)敌装甲(列)车出现于前面距离约五十公尺，(遭到列车炮击)因事寡不得动(还)手，浜尾君(濱尾一郎，伍长，鳥取市賀露出身)战死，排长(分队长)率第五分队往总队部(二大队本部)联络时，我阵地北方发现敌兵数千(百)人，吹喇叭面向我阵地进攻。刘家湖方面之敌兵亦甚众，向我攻袭，各兵抱定决心待死，约历两小时许忽闻友军枪声四起，(此为第十中队来援，攻克刘家湖的战斗)，(此战中，护送补充物资的)第七中队(黒田指揮的護衛队一小队)及辎重兵队负伤颇重(损失车马七套)，(后进入刘家湖)在刘家湖取抵抗态势，伤兵送往卫生队，中途所有乡村均放火焚烧。

日記の記述は、敵軍の人数記録に多少誇張があるものの、行動を戦闘詳報の記録と照合でき、且つ死傷者の情報を提供しており、貴重な記録といえる。

四、3月24日、大隊主力の攻城戦

一方、大隊の主力(三個中隊、及び砲隊)は、東方に迂回して三仏楼、楊家廟から南下し、「午前七時三十分台兒庄北方一里ノ線ヲ通過」、周囲部落にある敵の小部隊と交戦しながら11:30、台兒庄城東北門外200米処の無名部落に進出した。偵察記録では

台兒庄ハ東北西三面高サ約三米ノ煉瓦壁(基脚部ハ土塁ヲナス)ヲ繞ラシ城壁外側ニハ幅約二~三米 水深三〇~七〇糎ノ水壕アリ 北正面ニハ東北角ヨリ稍々西ニ偏シ又中央部稍々西ニ各城門ヲ有ス。¹⁸

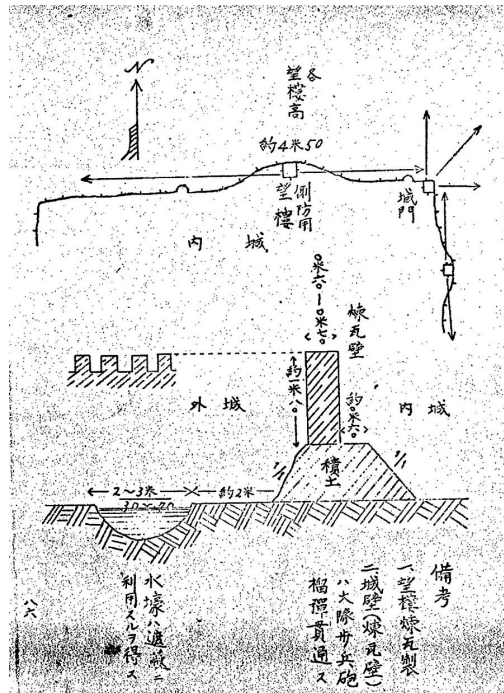


図2 城壁構造のスケッチ。歩兵第六十三聯隊戦闘詳報による。城壁は低く、堅固な造りではなかった。

城内の守備が嚴重だけでなく、城外も、「城壁北部ヨリ西方停車場附近ニ亘リ城壁、家屋及城壁停車場間点在スル墓地ヲ利用シ堅固ニ陣地」が築かれていた。

13:20、部隊は「城壁ニ迫り攻撃」を試みたが、「敵頑強ニ抵抗」¹⁹したので、仕切り直して作戦を部署した。

24日15:00、台兒庄北200米無名部落において、安永興八大隊長の下達した攻撃命令は次の内容であった。

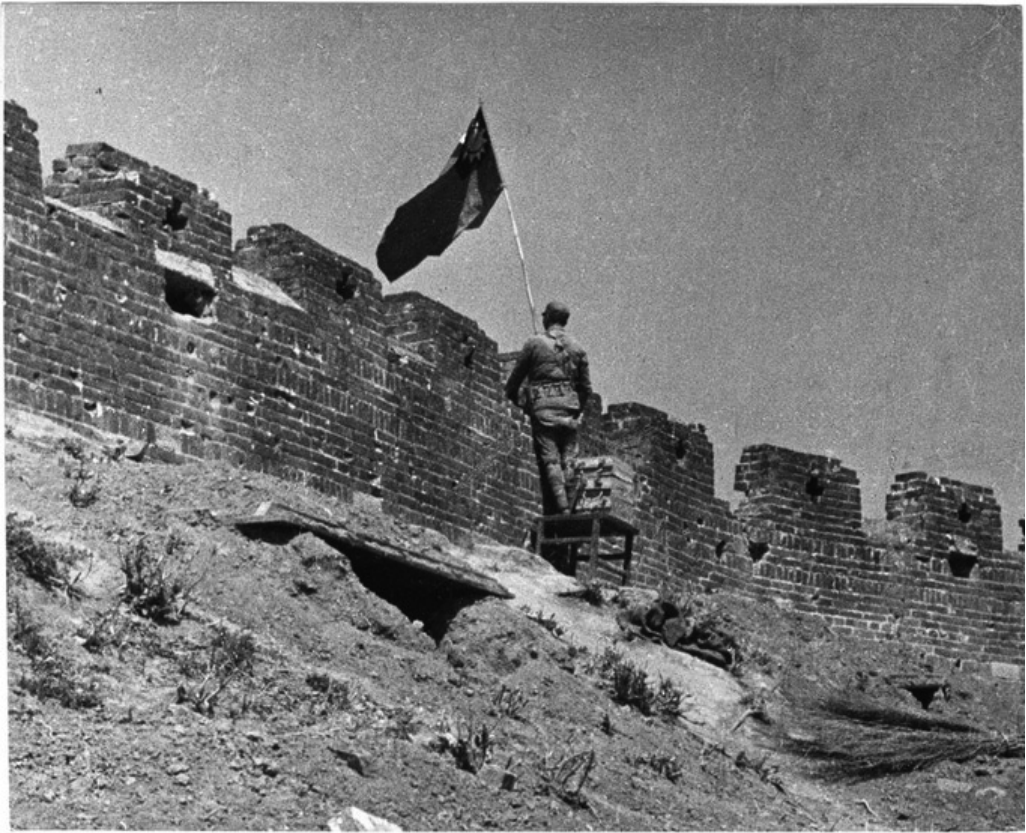


図4 当時の台児庄城壁、兵士下に「掩蓋陣地」が見える。ロバート・キャパ撮影。The International Center of Photography (ICP).USA より。

第七中隊（大野謹之助中尉）は敵の砲火を冒して西よりの突破口に前進、ほぼ同時に第六中隊（伊藤敏雄中尉）も東北門附近の破壊口に突進し始めた。城壁に近い200米の一带は空き地で、掩体物は殆ど無かった。前進中、多数の自動火器が城壁から現出して突撃隊を猛射した。城壁の下に接近すると、さらに敵の手榴弾の雨が飛来し、ために突撃隊に死傷者が続出した。先頭に立つ第七中隊長大野謹之助中尉は城壁前にて負傷し、代わりに連絡に同行した大隊副官の奥谷勤中尉が陣頭に立ち第七中隊を指揮して城内に突入した。

盛熾ナル敵火ノ下半壊ノ破壊孔ヲ攀チテ城内ニ突入シタルモ、死傷続出シ且敵火ニ阻マレ之ニ続クモノ尠ク 副官ト共ニ城内ニ突入シタル一部衆敵ヲ制シテ克ク其地歩ヲ確保シ 一時同方面ノ敵ノ氣勢ヲ殺キタルモ衆敵遂ニ敵セス悉ク壮烈戦死ヲ遂クルニ至ル。

つまり、奥谷勤中尉が率いる突入部隊の一部（約十名前後）は、破壊口から突入し、後が続かなかったため、城内に閉じ込められ、全滅した。

左第一線の第六中隊も順調ではなかった。西側の突撃路に向かって前進し「其先頭破壊孔ニ

達シ日章旗ヲ掲ケタルモ死傷続出シテ成功セス 剩へ此間砲兵隊及重火器部隊ハ彈藥漸ク缺乏ヲ来シ 爾後十分ナル射撃ヲ実施スルヲ得ス 時將ニ薄暮 大隊長ハ意ヲ決シ涙ヲ吞テ突撃ヲ中止シ兵力ヲ旧位置ニ集結シ戰場ヲ掃除シ、戦死傷者の収容をおこなった²¹。

安永大隊長は21:00、福栄聯隊長への電報において、「目下内外ノ連絡絶エ死傷続出ス 敵ハ益々増加シ我ヲ完全ニ包围セリ 彈藥到着セス 大隊ハ北門外ニ在リ」と失敗を報告した²²。

攻撃を中止した時間は「薄暮」と記されたので、この日の日没時間(18:25)から計算すると、七時前のことであろう。こうして攻城戦は、16:30～19:00の二時間半の間で行われ、第一線攻撃部隊の二個中隊約300名が参加し、城内突入したのは、右第一線の大隊副官奥谷勤(米子市浦津出身)中尉が率いる第七中隊の一部(十名ほど)で、城内で全滅した。戦闘詳報の記録ではこの日、城外の部隊と合わせ「我損害約百名、馬十数頭」である。突撃部隊の約3分の1が死傷したことになり、第二大隊にとって、台児庄で喫した最初の敗北で、大きな痛手であった。『渋谷昇日記』にも、24日攻城について「話しによれば、第四中隊(翻訳の誤り。正は「(第二大隊)四個中隊」)二十四日の戦闘において、死傷は百数十人に達した、という(3月27日条、渋谷の中隊は未参加)」。前日(3月23日)の作戦には死者一人もなく、19日嶧県の堅固な城壁を陥落した際も、死亡三名、負傷十数名にすぎなかった。しかし、第二大隊にとって、これは悪夢の始まりに過ぎなかった。

夜21:00の電報で、安永大隊長は福栄聯隊長に「彈藥ヲ全部射尽シ現在ノ儘ニテハ成功ノ見込ミナシ」「敵兵力少クモ五-六千装備優秀頑強ナリ」と報告し、兵力の増加、空爆、野砲彈藥の補充を要請した²³。

この間、鉄道から中国軍の援軍が次々と到着し、「優勢ナル敵ハ依然台児庄城壁ヲ占領シ尚有力ナル一部隊ハ停車場附近ニ集結シ 北方ヲ除ク附近一帯ノ部落ハ殆ト敵兵充滿シ 二百内外ノ敵ハ近ク邵庄附近ニ侵入シアリ」という有りさまであった²⁴。

なお、この日、第二大隊の死亡者は32名であった²⁵、翌25日の死亡者を合わせると、緒戦の三日間で、死亡者37名になる(配属部隊の死者を含まず)。表一は戦後『歩兵第六十三聯隊史』にある「戦没者名簿」から、筆者が整理し作成した、安永大隊の死傷者リストである。突撃を率いた奥谷勤中尉の名前や、渋谷昇日記に出た谷川良吉、黒川憲博、濱尾一郎、三澤整一等の名前が見られる。大行李長はどちらなのか、名前は分からないが、中にいるはずである。

彈藥補充の輜重行李隊(黒田隊)は紆余曲折をへて25日午後大隊本部に到着し、さらにこの日、支那駐屯軍の九六式15糎榴弾砲二門、翌日、10A砲兵第一中隊(改造三八式野砲四門)も台児庄に到着した。派遣部隊の戦力は、人員2300余名、火砲18門、重機関銃14挺に増強された。安永大隊長は、失敗挽回のため、この新兵力をもって27日早朝の第二回目の攻撃を部署した。

表一

| | 氏名 | 階級 | 出身地 | 死亡地 |
|-------|-------|-----|--------|-----|
| 3月24日 | 〇〇政晴 | 歩伍 | 気高郡岩坪 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇末吉 | 伍長 | 松江市和多見 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇民 | 歩伍長 | 松江市乃木 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇整一 | 歩上 | 能義郡安来 | 三里庄 |
| 3月24日 | 〇〇功 | 歩上 | 能義郡広瀬 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇好夫 | 歩伍 | 仁多郡布勢 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇栄吉 | 歩上 | 仁多郡三成 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇利一 | 歩上 | 仁多郡八川 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇己範 | 歩伍 | 仁多郡馬木 | 支那 |
| 3月24日 | 〇〇傳市 | 歩伍 | 大原郡阿用 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇川栄蔵 | 歩伍 | 大原郡加茂 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇留由 | 歩伍 | 隠岐郡五箇 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇光人 | 伍長 | 隠地郡五箇 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇徳市 | 歩上 | 海士郡海士 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇市 | 伍長 | 知夫郡知夫 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇駛一 | 歩軍 | 米子観音寺 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇信夫 | 歩伍 | 気高郡安長 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇玉平 | 歩上 | 気高郡河原 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇長久 | 歩上 | 気高郡松原 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇良吉 | 歩伍 | 気高郡青谷 | 三里庄 |
| 3月24日 | 〇〇長利 | 歩上 | 東伯郡東園 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇勇 | 歩上 | 東伯郡妻波 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇重雄 | 歩伍 | 東伯郡米田 | 三里庄 |
| 3月24日 | 〇〇憲博 | 歩上 | 東伯郡巖城 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇末広 | 歩軍 | 東伯郡横田 | 三里庄 |
| 3月24日 | 〇〇巖 | 歩上 | 東伯郡上大立 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇定光 | 歩伍 | 東伯郡田後 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇優 | 歩准 | 東伯郡門田 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇良治 | 歩上 | 西伯郡諏訪 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇勤 | 歩大尉 | 西伯郡浦津 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇基 | 歩上 | 西伯郡古豊千 | 台児庄 |
| 3月24日 | 〇〇来一 | 歩伍 | 西伯郡平岡 | 台児庄 |
| 3月25日 | 〇〇強一 | 輜重上 | 周吉郡西郷 | 支那 |
| 3月25日 | 〇〇一郎 | 歩伍 | 鳥取市賀露 | 敦上 |
| 3月25日 | 〇〇寿次 | 歩上 | 西伯郡中町 | 台児庄 |
| 3月25日 | 〇〇寿一 | 歩上 | 西伯郡真野 | 台児庄 |

五、25日の台儿庄攻城戦は存在したか

台兒庄の戦いは、1938年3月23日、歩兵第六十三聯隊第二大隊を中心とする1500名混成部隊の派遣によって幕を開けた。最初の本格的激戦は、前記3月24日午後4時30分からの第六、第七中隊による城内突入である。この突撃は、中国軍第三十一師（池峰城師長）一八六団（王烈武団長）の懸命な抵抗に阻まれ、百名を超える死傷者を出して失敗に終わった。

戦いの仔細について、前文において日本軍の記録を紹介したが、中国軍側にも戦闘記録が残されている。しかし照合してみると、肝心な日時、場所など重要な情報はなかなか合わない。また、不思議なことに、公式の記録ほど、ズレが大きい。詮索したすえ筆者は、その理由は、戦史記録の“元”となる《戦闘詳報》の記述に誤りがあったのではないかと考えるようになった。公式の記録はおおよそ、下から上に、つまり師の戦闘詳報から上級集団軍の戦闘報告へ、さらに軍全体の記録、国家の記録へと、転記され固定化していくと思われるが、もし、基礎となる《戦闘詳報》に不正確を生じると、すべての記録も同じように間違ってしまうことになる。このような間違いが、中国側の台兒庄の戦闘詳報に見られる。

例えば、3月24日の日本軍による第一回目の台兒庄攻撃に関して、守備を担当した中国軍《第三十一師台兒庄戦役戦闘詳報》は以下のように記述している。

3月24日条

17时许，北洛之敌复向刘家湖反攻，…我台儿庄北部城垣摧毁甚多，战况较午间尤烈，敌我伤亡甚重。18时顷，敌由击破口突入城内约200余，旋经我奋力歼灭。我守城王团长震，营长姜常泰均负重伤。

25日条

16时顷，敌集中炮火猛攻台儿庄，北门及小北门倒塌数丈。…17时顷，敌由小北门突入200余名，当经围困与大庙内，我王师附（副）冠五督励官兵内攻外防，激战猛烈，卒将破口堵塞。

27日条

…6时30分，敌步兵约六七百名，在炮火掩护下向我猛扑，经我以炽盛火力歼灭甚众，敌屡有增加，更番近迫。7时顷我守两北门之一八一团第三营牺牲殆尽，被敌突入300余，即植立日旗数面，势甚猖獗。我王师附（复）冠五督率第一八六团第二营扼险堵击，经激烈战斗，…卒将侵入之敌击毙大半，…残敌均逃据东南碉楼及大庙内…²⁶

と、緒戦における敵軍（日本軍）の三回の突撃戦を記している。しかし、日本の史料には、24日第一回目、27日第二回目の攻撃を記しているが、25日にも攻城戦闘があった事は確認できない²⁷。第三十一師の戦闘詳報を仔細に分析すると、下線部分のように、24日と25日の記述に「突入城内約200余」の部分が重複し、25日と27日の記述に敵を「大廟内」に包囲した部分も重複している。実際、敵（日本軍）最初の「突入」は（200名ではなく十名前後）24日の出来事であり、「大廟」（清真寺）に立て籠もった事は27日の出来事であった。違う日時の戦闘場面の一部は、

実際存在しない、25日の攻城戦闘の記述に見られているわけである。考えられることは、25日の記述は、24日と27日の戦闘に対する間違った「記憶」によって、創出された「幻」の戦闘ではないか、との疑いである。

中国軍の戦闘詳報とは、日本軍のように当時の命令書、筆記記録などによって作られた厳密なものではなく、かなり時間が経ってから、複数の証言を基に復元、再現した可能性は高い。その場合、攻撃日は、24日と27日の「記憶」と同時に、25日の主張も現れ一緒に混同され、「戦闘詳報」として再現した時、幻の25日の戦闘が作られた、と思われる。内容も、24日と27日の記憶の各一部の組み合わせに過ぎない。この誤りはその後、報告を通じて上級部隊である第二集団軍の戦闘詳報（同資料、2頁）に継承され、戦後、公式の記録《台兒庄大戦大事記》の内容になり（同資料、329頁）、また、研究情報を発信する韓信夫の著書《鏖兵台儿庄》²⁸に取り入れられ、連鎖的に拡大していったと思われる。

この公式記録の誤りに対して、事実に近い記録は、むしろ民間にある。戦地記者盛成の《盛成台儿庄紀事》に、以下のような日記がある。

24日「四时，敌步兵由两个北门之间冲入破城。四时许退出，寨墙边守军一八六团王烈武团长受伤…」

〔25日に攻城戦の記録はなし〕

27日「十二时，敌福荣第六十三联队约八百至千人左右由左北门与右北门之间冲入，进占左北门内立足东岳庙未曾退出，展开白刃战、巷战、隔壁战，密集射击…」

と。数字にはずれがあるものの、24日の戦闘と敵の城内突入、27日、敵突入後、「東岳廟」（正しくは清真寺）に立て籠もった事実が記述され、「25日の戦闘」に関する記述はない。これは日本軍の各種記録とほぼ一致する²⁹。盛成は真面目な記者で、台兒庄の日記録に、実名入りで複数の記者の報道を引用している。つまり、記者報道の集大全の手法で、日記録を書いているのである。

さらに盛成著《七十年前的台儿庄紀事》には、「前线慰劳附文四 王烈武谈战事」の一節があり、1938年6月1日、王烈武団長の自筆の「北門殲敵記」を録している。中に、日本軍側が知らない、一部城内に入った兵士の最期の様子も記している。

（24日）…下午一时许，敌机一架在北门上空盘旋侦察，并在敌阵投下通讯袋以后，敌人炮火轰然又作，较前益烈，仍对北门附近新堵之寨垣集中轰击，且更向两侧逐渐扩张；间更施放烟幕弹，灰尘烟屑，弥漫天空。俄顷之间，新填堵之寨垣即又轰成平地；而附近之寨垣数处，亦被轰毁；北门守兵，伤亡甚众。敌人十数名，乃得于此时乘机由北门西端缺口冲进，窜入附近之数间茅屋中，企图掩蔽顽抗。我鉴于时机危迫，间不容发，乃亲率士卒，驰赴缺口堵击，并亲自操机枪一挺，向敌扫射，目击敌兵被余射中倒地者六七十人³⁰。



図5 王烈武団長の「北門殲敵記」盛成《台儿庄記事》より

当事者王烈武団長による、事後二ヶ月ほどの記憶なので、時間(正は午後4~7時)を除けば、事実に合っていると思われる。文章の前の部分は、第二大隊主力が台兒庄城北に到達(11時ころ)してからの火力偵察と思われ、あとの部分(本論引用)は夕方4時30分、突入攻撃の様子である。ここで、城内に進入したのは「200余」ではなく、「十数名余」であること、城内の小屋に立てこもり、王の機関銃掃射で六、七名が斃れたことなどが記されている。この様子は、日本側の第二大隊の戦闘詳報の記述に極めて近い。

以上のように、「25日の攻城戦闘」の幻、「200名突入」、「大廟に立てこもる」などの誤りと重複は、第三十一師戦闘詳報のミスにもたらされた結果と考えられよう。

注

1. 「瀬支作命第三十五号」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111252700.画像9/55 No.825. 歩兵第6 3連隊 台兒庄攻略戦闘詳報 昭和13年3月2日~昭和13年4月6日(2分冊の1)(防衛省防衛研究所)。
2. 「北支方面作戦記録 第1巻 2(2)」JACAR: Ref.C11111708200. No.818.
3. 『磯情』の記録では「敵遺棄死体11000」名とある。この数は14~18日の間の概算で、内訳は、界河付近の戦闘は1400名、滕県、南沙河の戦闘は4640名(滕県攻撃戦は3100名)、南沙河より臨城までの追撃戦は2580名(「滕縣臨城付近瀬谷支隊戦闘經過要図」磯情第七十三号、JACAR: Ref.C11111034700)。
4. 『昭和12年度陸軍動員計画令同細則の件』JACAR: Ref.C01007658600. 該当部分を参照されたい。
5. 同前「諸部隊兵器表」No.371以下、また、JACAR: Ref.C01007658900 No.440 以下各該当部隊を参照。
6. JACAR: Ref.C11111252700.No.839.(前掲歩兵第六十三連隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。

7. JACAR：Ref.C11111257400.No.908, 940.歩兵第63連隊第2中隊陣中日誌、昭和13年1月1日～昭和13年5月31日(防衛省防衛研究所)。
8. JACAR：Ref.C11111252800.画像13/51、22/51 No.884, 893.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
9. JACAR：Ref.C11111266500.No.2087. 歩兵第63連隊第2大隊 第5中隊 台兒庄附近戦闘詳報 昭和12年8月29日～昭和13年4月6日(防衛省防衛研究所)。
10. JACAR：Ref.C11111252700.画像16-7 / 55 No.832-833.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
11. 「前線慰勞報告」盛成《台兒庄紀事》北京語言大学出版社、2007年、26-27頁。
12. 負傷者は不明。のち作成した戦没者リストには、この日、韓莊で三名の死亡者が記録され、他に臨城野戦病院で死亡した岩城良蔵もいるが、作戦地域の嶧県南部での死亡者記録はない(『歩兵第六十三聯隊史』(同刊行委員会、非売品)1974年、604-826頁戦没者名簿を参照)。
13. JACAR：Ref.C11111252700.No.838-839.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
14. JACAR：Ref.C11111252700.No.864.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
15. JACAR：Ref.C11111252700.No.865, 868.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
16. 曹聚仁《中国抗战画史》1947年、2011年、中国文史出版社再版、267頁至271頁。
17. 「歩六三戦詳第一四号附表其十四」JACAR：Ref.C11111253800.No.1106.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
18. JACAR：Ref.C11111252700.画像31-34 / 55 No.847-850 (前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
19. JACAR：Ref.C11111252700.画像26 / 55 No.842(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
20. JACAR：Ref. C11111266500.No.2082. (前掲歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台兒庄附近戦闘詳報)。
21. JACAR：Ref.C11111252700.No.853.(前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
22. JACAR：Ref.C11111252700.画像28/55、No.844 (前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)、「台兒庄派遣部隊台兒庄附近ノ攻撃戦闘經過要図」JACAR：Ref.C11111253800 画像24/47 No.1097 (前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)を参照。
23. JACAR：Ref.C11111252700.画像28/55、29-30/55 No.844, No.855-856 (前掲歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報)。
24. JACAR：Ref.C11111266500.No.2080. 画像25/56 (前掲歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台兒庄附近戦闘詳報)。
25. 『歩兵第六十三聯隊史』(同刊行委員会、非売品)1974年、604-826頁戦没者名簿より整理。
26. 《第三十一師台兒庄戦役戦闘詳報》《台兒庄戦役史料選編》、《台兒庄戦役資料選編編集組・中国第二歴史档案館資料編輯部》中華書局、1989年、22-28頁、参照。
27. 第二大隊はこの時、滄浪廟で弾薬の補充を待つ状態で、作戦可能な状態ではない。また、戦闘があった場合、複数の記録から詳細な命令書(下達者、受取者、時間、場所、下達方法が記録するもの)が確認出来るはずである。(歩兵第六十三聯隊 台兒庄攻略戦闘詳報JACAR：Ref.C11111253400. および、Ref.C11111266500.(歩兵第六十三連隊第二大隊第五中隊 台兒庄附近戦闘詳報を参照)。
28. 韓信夫《鏖兵台兒庄》重慶出版社、2008年、第五章 台兒庄城寨阵地战(4)を参照。
29. 盛成《台兒庄紀事》北京語言大学出版社、2007年、143頁、147頁。
30. 前掲盛成《台兒庄紀事》、121頁。